

シリーズ

人権を  
学ぶ場を  
つくるとは①



# ルールづくりはメッセージ

Facilitator's LABO〈えふらぼ〉、VAW研究会 くりもと あつこ 栗本 敦子さん

人権を学ぶとは、どういうことでしょうか。それは、人権を教養として身につけることではありません。人権が尊重される社会をつくっていくこと、つまり自分自身に向き合い、他者との関係をはぐくみ、一人ひとりが大切にされ、もっている力を発揮できるような社会にむけてはたらきかける、といった行動へとつなげるために、学ぶのではないのでしょうか。

行動へつながる学びとして、ワークショップ（参加体験型学習）への関心が高まり、実践が広がっています。ワークショップの場では多様な参加者のかかわりをおして学びを創りだしていきます。そうした学びの場をささえるのがファシリテーター（促進役）です。このシリーズでは、ファシリテーターとして人権を学ぶ場をつくるとはどういうことなのかを、みなさんとともに考えていきます。

## ■ファシリテーター自身がモデルとなる

ワークショップのはじめには「ルールづくり」を行ないます。安心して学ぶためにどのようなルール（約束ごと）があればよいか、参加者に考えてもらいます。

最近、行ったワークショップで出てきたのは、以下のようなものでした。

「話を途中でさえぎらない、時間を守る、積極的に発言する、発言を強制されない、プライバシーを守る、一人で長くしゃべりすぎない、自分の意見をしっかり言う、人の意見をよくきく」

それぞれの項目を、できるだけ発言された参加者自身の表現を尊重して板書していきます。そのうえで、問いかけます。「〇〇しない」というものを、「△△する」と言いかえるとどうなりますか？。人権を扱うにあたり、できるだけ肯定的な姿勢で場にのぞみたいのです。人権は、ともすれば「差別をしない」という否定形や禁止で表現されてきました。けれど、「してはいけない」というメッセージは、身動きしにくくなり、人を遠ざけてしまいます。「人権ってむずかしそう（だから、かかわらないでおこう）」となってしまうのはとても残念なことです。

「差別をしない」とは、なにを「する」ことなのでしょう？ その問いだけで、ワークショップが組み立てられます。みなさんはどう思いますか？ ぜひ、具体的に考えてみてください。

ルールづくりの話にもどりましょう。肯定形の表現として、こんなアイデアがでてきます。「話を途中でさえぎらない」→「最後までしっかりきく」／「発言を強制されない」→「パスもOK」／「一人で長くしゃべりすぎない」→「みんなで時間を分かち合う」。参加者に問いかけながら、私自身もどんなふうに表現できるか、一緒に考え、提案します。

ルールを参加者とともにつくる、出された意見を尊重する、肯定的な表現をこころがける。こうしたファシリテーターの言動も参加者へのメッセージとなります。伝えたいことを繰り返し言葉にしても、やってることとくい違っているのはメッセージは届きません。言語メッセージと非言語メッセージが矛盾した状態——「今日はゆっくりすすみましょう」と言葉ではいいながら、とても早口だったり、しょっちゅう時計をみたりする、など——では、参加者は混乱します。人権を尊重するということをファシリテーター自身の言動で示す。そのためには、まず「あたま・こころ・からだ」のトータルな存在として自分の状態を

よく把握することです。そしてファシリテーターとしての役割にのみとられるのではなく、ひとり人間として正直に率直に参加者と関わっていく。そのあり方が、言葉をこえた人権尊重のメッセージを参加者に伝えるのではないのでしょうか。

## ■安心できることとチャレンジすること

ルールづくりでよくでてくるものに「否定しない」「批判しない」があります。これを肯定形であらわすとどうなるでしょうか。「異なる意見・考え方も尊重する、いったんはうけとめる」といった表現はどうでしょうか。

ワークショップでは、答え（正解）のない問いを考えます。ファシリテーターはテーマとしてとりあげる課題についてともに考えるための問いをたてる。参加者は相互の話し合いを通じて、一人ひとりが自分なりの気づきや発見をしていく。それがワークショップでの学びです。「そんな意見おかしい」「それはまちがってる」といった否定は、自由な話し合いを妨げます。否定は、しばしば無意識のうちに想定している「正解」や、自分の価値観にもとづいているものです。そうした前提を問い直さない話し合いからは新たな学びはうまれないでしょう。

では、どのような意見も否定せず、尊重すれば、学びがうまれるのでしょうか。「なるほど、そんな考えもあるね」「あなたはそう思うんですね」と、お互いの意見をききあう。それで話し合いは深まるのでしょうか。

安易な価値相対主義からは、発見はうまれません。意見の違いを「いろんな違った意見がありますね」ととどめるのではなく、「なぜ違うのだろう」と考え、自分の考えを説明し、相手に問いかける。そうした姿勢こそが、本当に相手を理解しようとすることであり、尊重するということです。そして、お互いにやりとりし、理解を深めていくなかで、違いのなかから一致点を見つめたり、どうしたら違ったまま一緒にいられるかを模索したりすることは、まさに現実の社会の中で、立場の違いや対立をともなった人権課題にどう向き合うかに通じます。そう考えると、相手のありようを否定してしまうような言動は問題ですが、意見に対する建設的な批判はむしろ歓迎すべきものです。

批判すること・されることに慣れている人は多くはありません。日常では避けている人も多いでしょう。けれど、学ぶ場であるワークショップにおいては、ぜひチャレンジしてほしい。気になる意見があったときに、「なぜそう思うのですか」「私はこう考えるのですが」と、いつもより一歩ふみこんで言ってみる。その先に、学びがうまれます。そしてファシリテーターは参加者が安心してチャレンジできる場をつくるためにルールを確認するのです。どのような話し合いの場をつくるかへの配慮は、「結果・内容だけでなく、過程を重視する」ということともつながっています。

今回は、「過程を重視する」ということの意味を、「ワークショップのなかで問題だと感じる発言があったときにどうするか」ということから考えたいと思います。

このシリーズの内容にかかわっての経験談や、ご意見をおきかせください。今後のシリーズのなかで、皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。（送付先は本誌12ページ参照）